

# 教育学部生のキャリア展望に関する基礎的研究(2)

—入学後2年間のキャリア展望の変遷に着目して—

八幡 ななみ・高野 久美子

『教育学論集』第67号

(2016年3月)



## 教育学部生のキャリア展望に関する基礎的研究（2）

—入学後2年間のキャリア展望の変遷に着目して—

八 幡 な な み・高 野 久 美 子

### 1. 問題と目的

教育学部キャリア教育小委員会では、2014年度より、学生の実態を把握し、学部カリキュラムの向上に役立てるため、また支援ニーズのある学生の早期発見のためのツール開発を目的として、教育学部全学生を対象にした継続的な質問紙調査（以下、学生調査とする）を実施している。実態把握のテーマの一つが、将来キャリアの展望である。筆者らが、将来キャリアの展望に着目する理由は、展望とは異なる「予期せぬ事態」に遭遇した際にも、展望を再構築できるような対処力を身に着けることが、不安定な雇用情勢の続く社会では重要であると考えからである。

キャリア介入の方法は、社会情勢に影響を受け発展している。Savickas（2011）は、労働環境の変遷を振り返り、21世紀初頭からの急速な情報化、デジタル化、グローバル化の影響を受け、市場の変化にいち早く対応できるよう組織は縮小化、非正規雇用労働者は増加していると指摘している。それに伴い、キャリア介入の方法も、職業指導からキャリア教育、そしてキャリア・カウンセリングへと移行していると分析している。Savickasは、個人を職業に適合させる従来のマッチングではなく、仕事を個人に適合させることに価値を置き、個人が自分自身の人生の主体者となって、現実を調整しながら、自身でキャリアを構築する「キャリア構築理論」を提唱している。Savickasの理論を、職業に就いていない大学生に応用すると、主体的なキャリア「展望」を構築する姿勢が重要なのではないかと筆者らは考える。

上述のようなキャリア形成の変化は、日本の大学生にとっても無関係ではない。1990年代以降のグローバル化と経済競争の激化の結果、昨今の雇用情勢には、正規雇用枠の減少、不安定・低賃金で、企業内教育の乏しい非正規雇用の増加という特徴が見られており、大学生の就労の不安定化に繋がったと指摘されている（児美川、2014）。さらに、教員を目指す学生にとっても、主体的なキャリア展望の構築が必要とされている。教員採用試験の倍率は高く、昨年度は5.7倍であった（文部科学省、2015）。その中で、本学の教育学部現役生の結果は、昨年2014年度の合格率は32.7%（合格者数36名）、本年2015年度の合格率は43.4%（合格者数49名）と、教員養成学

部としての実績を積んでいると言える（創価大学 教職キャリアセンター HP）。しかし、教員採用試験を受験した半数以上の教育学部生が不採用となっているのは、看過できない現実である。そのような学生にとっては、卒業後の進路をどのように選択していくかが課題となる。特に、教員採用試験の不合格を「予期していなかった事態」として体験する学生の場合、他の進路の選択肢に向けて進むことは容易ではないと想像され、キャリア展望の再構築を迫られる状態であると言える。

また、思い描いていた将来キャリア展望の変更は、教員採用試験の合否以前にも様々な形で起こり得る。本学では2010年度入学生より、教職課程に閾門制度が適用された。教員免許状取得に必要な二つの実習、すなわち介護等体験は2年生前期までの通算GPAが3.0以上であること、教育実習は2年生後期までの通算GPAが3.0以上であることが登録の条件となったのである。この条件を満たすことが出来ずに、教員を諦め、他の進路の選択肢を検討する学生もいる。または、当初は教員志望であったが、教職関係の授業を受けるうちに、自分の教員としての適性に悩む場合や、教員という職業への興味や熱意を失う場合もある。このような状況は、大学生にとって将来キャリア展望が不明瞭になる危機的な状態であると同時に、自身を振り返り、現実との折り合いをつけながら選択肢を検討するなど、将来キャリア展望を再構築する機会とも捉えることができる。

筆者ら（八幡・高野、2014）は、「将来キャリア展望」に着目し、2014年度入学生の学生調査のデータを分析した。その結果、将来キャリアの展望をはっきりと持っている学生ほど、大学に適應している感覚を持ちやすいことが示唆された。言い換えると、将来キャリアの展望が不明瞭な学生は、大学の適應に難しさを感じているということである。また、前期から後期にかけて、将来キャリアの展望が不明瞭化する学生が一定数存在することが明らかとなった。追跡調査となる本研究の研究1では、学生調査のデータを継続して分析し、入学から2年間にわたる将来キャリア展望の変遷について検討することを目的とする。また、研究2では半構造化面接を実施し、量的な分析結果に質的データを加えることによって、将来キャリア展望の不明瞭化を体験する学生が、展望を再構築できるような支援の在り方について示唆を得ることを目的とする。

## 2. 研究1：方 法

### （1）使用するデータについて

教育学部キャリア教育小委員会が2014年度より継続的に実施している学生調査の2014年度入学生のデータを用いる。本研究で用いた項目を表1に表す。項目は、既存の学生調査の項目を参照し、独自に必要なと思われるものを追加した。＜基礎的な学習方略＞＜モニタリング方略＞＜プランニング方略＞の項目は、藤田（2010）と藤田・

富田（2012）が作成した学習方略に関する尺度から借用した。＜問題との距離を取る態度＞は、福森・森川（2003）の体験過程尊重尺度（The Focusing Manner Scale; FMS）の中の、「問題との距離を取る態度」因子を借用した。＜進路選択に対する自己効力感＞は、浦上（1995）の進路選択に対する自己効力感尺度から、進路選択に関連する4項目を借用した。これらの項目は、設問に合うように語尾を修正して用いた。項目を各期別に選定し、マークシート形式の質問紙を作成した。設問は「あなたが日常感じているあなた自身についてお尋ねします。状況によって変わることはあるでしょうが、日ごろのあなたを基準に、あまり考え込まずに素直にお答えください。」とし、5件法（1：そう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：多少はそう思う、5：とてもそう思う）で回答を求めた。＜時間の使い方＞のみ、設問を「あなたは現在、次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしていますか？」とし、7件法で回答を求めた（1：全然ない、2：1時間未満、3：1時間以上～3時間未満、4：3時間以上～5時間未満、5：5時間以上～7時間未満、6：7時間以上～10時間未満）、7：10時間以上）。

## （2）研究の手順

2014年度入学生に対して、以下のタイミングで質問紙を配布し、即日回収した。当日欠席した学生数名に対しては、後日基礎演習担当教員を介して記入を依頼し、回収した。2015年度後期に関しては、各授業の担当教員が配布し、後日回収した。

2014年度前期	4月第1週	基礎演習第1回目
2014年度後期	9月第2週	後期ガイダンス
2015年度前期	4月第1週	キャリアガイダンス
2015年度後期	9月～10月	教育学部の授業時

表1 学生調査 項目表

		1 年		2 年	
		前期	後期	前期	後期
展望	将来の進路（キャリア）について見通しがある	○	○		○
	これからの4年間で学びたいことがはっきりしている	○			
	これらの4年間の学びの準備ができています	○			
	在学中に学びたいことがはっきりしている		○		○
	在学中にすべきことの計画ができています		○		○
基礎的な 学習方略	分からない単語や用語は調べる	○		○	
	大事な話はメモやノートを取りながら聞く	○		○	
	内容を覚えるため、ノートを何度も書き写しながら勉強を進める			○	
モニタリ ング方略	ある物事について勉強するときには、他の様々なものと結びつけながら考える			○	
	勉強するときには、自分が既に知っているものと結びつけながら行う			○	
	試験勉強をするときは、良くわかっていると、そうでないところを探しながら勉強する			○	
	何を求められているのか考えてから課題をする			○	
プランニ ング方略	1日にどれくらい学習するか考えてから取り組む			○	
	勉強は時間を決めてする			○	
	いつも自分にあった勉強のやり方を考えながら勉強する			○	
汎用的 スキル	パソコンを上手に使って情報の収集・加工・伝達ができる	○			○
	筋道を立てて考えることができる	○			○
	自分の意見をうまく発信することができる	○			○
	必要な情報は自分で収集できる				○
セルフ・ マネジメ ント	すべきことは優先順位をつけて実行できる	○	○	○	
	計画的に時間を使うことができる	○	○	○	
	目標を立てて物事に積極的に取り組む	○		○	
	お金は計画的に使う	○		○	
大学 適応感	学習面で、うまくいっている		○		○
	学科の学びは、自分の興味・関心に合っている		○		○
	大学の中にホッとできる場所がある		○		○
	学校に来たら必ず誰かと話をする		○		○
	対人関係で、うまくいっている		○		○
	創立者の著作や講演を学びたいと思う		○		○
	創立の精神を学び、実生活に生かそうとしている		○		○
問題との 距離を取 る態度	生活の中で悩みがあるときは、距離をおいてみるようにしている		○		
	何か悩み事があるときには、ちょっとやめて、間をとれる		○		
	生活の中で悩みがあるときには、考えすぎないようにしている		○		
	自分を責めることが少ない		○		
	「こう思うべきだ」と自分に強制することが少ない		○		
進路選択 に対する 自己効力 感	自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶことができる				○
	自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を調べることができる				○
時間の 使い方	PCや携帯・スマートフォン、その他ゲーム機器でゲームをする		○		○
	授業の課題や宿題に取り組んだり、準備学習、復習をする		○		○
	授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする		○		○
	部活動や同好会、サークルに参加する		○		○
	大学外でアルバイトや仕事をする		○		○
	読書をする（マンガ・雑誌を除く）		○		○

## 3. 研究1：結 果

## (1) 調査協力者

2014年度入学生206名（男性：88名、女性：118名）に対して、回答者数は、1年前期200名、1年後期185名、2年前期174名、2年後期169名であった。〈展望〉の項目を実施した1年前期・後期、2年後期の3期ともに回答のあった調査協力者のデータを分析対象とする。有効回答数は148名であった。サンプルの数を確保するため、〈展望〉の項目以外で欠損値の存在するデータも分析に含めている。

表2 1年前期・後期、2年後期の有効回答数 内訳

		性別		計
		男性	女性	
学科	教育	24	30	54
	児童教育	26	68	94
計		50	98	148

〈展望〉得点においてサンプルに偏りがあるか検討するため、性別、学科ごとにt検定を行った。結果、〈展望〉得点において、性別・学科別に有意な差は確認されなかった。したがって、今後の〈展望〉得点に関する分析は、有効回答148名を対象に行う。

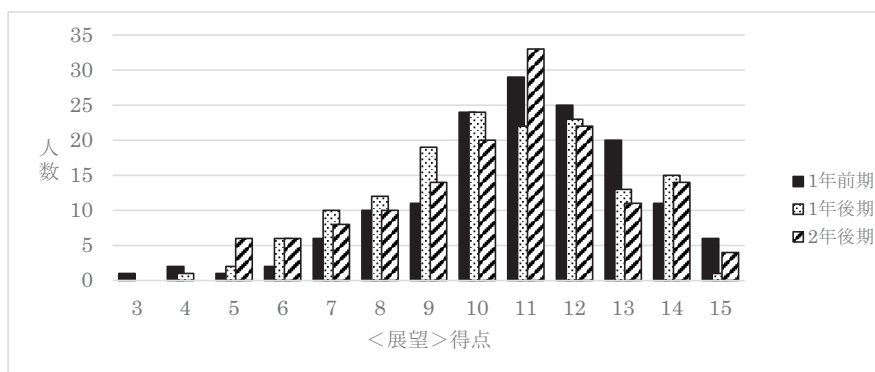
## (2) 1年前期から2年後期における展望得点の変化

2年間の〈展望〉得点の変化を検討するため、各期の〈展望〉得点の間で、対応のあるt検定を行った。1年前期から後期にかけて〈展望〉は0.49下降しており、その差は有意であった ( $t(147)=2.851, p<.05$ )。1年後期と2年後期の間には有意差は見られなかった。また、3期の〈展望〉得点で相関分析を行った。結果、1年前期と1年後期の間には、 $r=.596, p<.00$ 、1年後期と2年後期の間には、 $r=.533, p<.00$ の、中程度の有意な相関が見られた。よって、対応のあるt検定の結果が示すように、1年前期から2年後期にかけて、展望は全体的にごくわずかに下降しているが、相関分析の結果から個人内での変化は少ないものと推測された。

表3 3期の〈展望〉得点の記述統計量

		平均値	標準偏差
1年	前期	10.89	2.33
	後期	10.40	2.35
2年	後期	10.50	2.45

図1 3期 &lt;展望&gt;得点の分布



## (3) 1年前期・後期、2年後期の展望得点によるクラスター分析

3期にわたる<展望>得点の傾向性から群分けして検討を行うため、クラスター分析を行った。グループ化の方法は、最もバランスが取れているとされる Ward 法を用いた。デンドログラムの結果から、4つのクラスターに分けることが妥当と判断した。4つのクラスターの平均値を表4に、名称と人数を表5に示す。

表4 &lt;展望&gt;4クラスターの平均値と各期間の有意差

クラスター	1年前期 平均値 (SD)	1年後期 平均値 (SD)	2年後期 平均値 (SD)	有意差
1	13.4 (1.07)	12.80 (1.05)	12.63 (1.26)	1年前期 < 1年後期・2年後期
2	11.27 (1.10)	11.16 (1.42)	10.89 (2.01)	n.s.
3	9.66 (1.77)	8.46 (1.60)	9.90 (1.45)	1年前期・2年前期 > 1年後期
4	7.19 (1.91)	7.44 (1.46)	6.00 (0.97)	1年前期・後期 > 2年後期
全体平均	10.89 (2.33)	10.40 (2.35)	10.50 (2.45)	1年前期 > 1年後期・2年後期
クラスター間 有意差	1 > 2 > 3 > 4    1 > 2 > 3・4    1 > 2 > 3 > 4			

※有意水準  $\alpha = 0.05$ 

表5 4クラスターの名称と人数

	人数	割合 (%)
1 「高得点維持」群	35	23%
2 「平均維持」群	56	38%
3 「平均以下／V字型」群	41	28%
4 「低得点／2年後期下降」群	16	11%



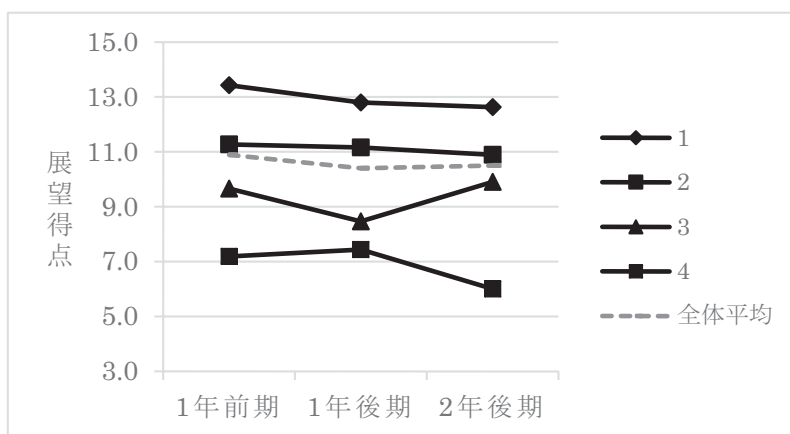


図2 4クラスターの平均値の推移

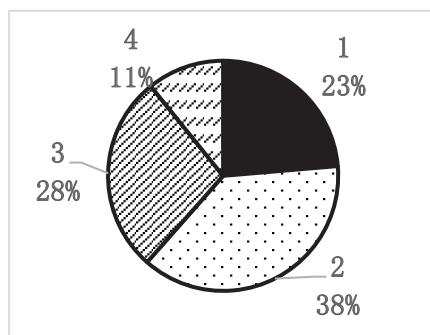


図3 有効回答者 (N=148) 内のクラスターの内訳

「1：高得点維持」群（35名）と「2：平均維持」群（56名）で、全体の6割以上を占めている。これらの学生は、＜展望＞の各項目で、「どちらとも言えない」「多少はそう思う」「とてもそう思う」と多く回答した学生であり、将来キャリアや大学生生活の展望が、ある程度、または明瞭に持てている学生であると推測される。

「3：平均以下／V字型」群（41名）は、1年前期から後期にかけて、展望がやや不明瞭化し、2年後期では持ち直している学生であると推測される。約3割の学生がこのタイプに当てはまる。「4：低得点／2年後期下降」群（16名）は、入学当初から将来キャリアの展望、大学生生活の展望が不明瞭であった学生であり、2年後期にはさらに不明瞭化している。このタイプの学生は有効回答者中1割であり、人数としては少ないが、一定数存在することが示唆された。2年間をかけての展望の明瞭さの変化が、どのような要因により引き起こされたのかを検討する必要がある。

#### （４）クラスターごとの特徴

各クラスターの特徴を検討するため、クラスターを独立変数、その他の変数を従属変数として一元配置分析の分散分析と多重比較（Tukey 法）を行った（表６）。

##### i. その他の変数

「１：高得点維持」群は、１年前期から２年後期の２年間を通して、＜基礎的な学習方略＞＜汎用スキル＞＜セルフ・マネジメント＞＜問題と距離を取る態度＞＜大学適応感＞＜コーピング・スキル＞において、４つのクラスター中最高得点であった。将来キャリアの展望や、大学生生活の展望が明瞭な「１：高得点維持」群の学生は、健康的で充実した大学生生活を送るために必要なスキルを身につけているという自己認知を持っていることが示された。反対に「４：低得点／２年後期下降」群は、＜基礎的な学習方略＞＜セルフ・マネジメント＞＜大学適応感＞＜コーピング・スキル＞において、４つのクラスター中最低得点であり、大学生生活に適応できている感覚が弱いことが示唆された。

「３：平均以下／Ｖ字型」群は、１年前期の＜汎用スキル＞が４クラスター中で最も低く、「１：高得点維持」群よりも有意に低かった（ $F(3,144)=3.13, p<.05$ ）。さらに、１年後期の＜セルフ・マネジメント＞と＜問題と距離を取る態度＞も、「１：高得点維持」群よりも有意に低かった（それぞれ、 $F(3,143)=4.08, p<.05, F(3,139)=4.61, p<.05$ ）。これらのスキルや態度が、１年後期の展望の落ち込みと関連する可能性が考えられたため、後節で項目ごとに詳細な検討を行う。

また、２年後期に実施した＜進路選択自己効力感＞の「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶことができる」「自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を調べることができる」の２つの項目で、「１：高得点維持」群、「２：平均維持」群と、「３：平均以下／Ｖ字型」群、「４：低得点／２年後期下降」群の間に有意差が見られた（それぞれ、 $F(3,144)=20.73, p<.00, F(3,143)=9.25, p<.00$ ）。展望が不明瞭な学生は、明瞭な学生に比べて、自分で職業選択が出来る、仕事内容を調べられるという効力感が低いことが示唆された。

##### ii. ＜汎用スキル＞

＜汎用スキル＞の項目ごとに、クラスター間に有意差があるか検討したところ、以下の３項目において有意差が見られた（表７）。さらに、クラスターごとに対応のある  $t$  検定を行い、１年前期と２年後期の間の平均値の違いを検討した（表８）。

表6 クラスター×各変数 分散分析・多重比較の結果

クラスター		1	2	3	4	全体	有意差	
1年	前期	基礎的な学習方略 (2項目)	8.49	7.55	7.59	6.88	7.71	1 > 2・3・4
		汎用スキル (3項目)	10.20	9.30	8.76	9.38	9.37	1 > 3
		セルフ・マネジメント (4項目)	16.03	14.20	13.98	12.13	14.34	1 > 2・3 > 4
	後期	セルフ・マネジメント (2項目)	7.57	6.96	6.54	6.38	6.93	1 > 3・4
		問題と距離を取る態度 (5項目)	17.14	14.96	14.30	14.94	15.32	1 > 2・3
		大学適応感 (7項目)	28.63	27.71	25.85	24.44	27.06	1・2 > 3・4
2年	前期	基礎的な学習方略 (3項目)	11.73	10.98	11.19	10.93	11.21	n.s.
		モニタリング方略 (4項目)	15.03	15.02	14.64	14.93	14.91	n.s.
		プランニング方略 (3項目)	10.03	9.50	9.33	8.60	9.47	n.s.
		セルフ・マネジメント (4項目)	14.83	14.82	14.00	13.40	14.44	n.s.
	後期	汎用スキル (4項目)	15.00	14.49	13.68	13.06	14.23	n.s.
		問題と距離を取る態度 (5項目)	15.85	15.36	15.51	16.00	15.59	n.s.
		大学適応感 (7項目)	29.32	27.69	26.12	23.81	27.21	1・2 > 3・4
		自分の興味・能力に合 うと思われる職業を 選ぶことができる	4.37	4.05	3.46	2.75	3.82	1・2 > 3 > 4
		自分が従事したい職業 (職種)の仕事内容を 調べることができる	4.34	4.04	3.56	3.31	3.90	1・2 > 3・4

※有意水準  $\alpha = 0.05$ 

表7 クラスター×＜汎用スキル＞ 分散分析・多重比較の結果

(A= 1年前期、D = 2年後期)

クラスター		1	2	3	4	全体	有意差	df と F 値
A	筋道を立てて考えることができる	3.71	3.34	3.22	3.19	3.38	1>3	$F(3,144)=3.04, p<.05$
	自分の意見を上手く発信することができる	3.71	3.21	3.05	3.25	3.29	1>3	$F(3,144)=2.75, p<.05$
D	必要な情報は自分で収集できる	4.11	3.91	3.49	3.13	3.76	1・2>3・4	$F(3,143)=5.80, p<.05$

※有意水準  $\alpha = 0.05$

表８ ＜汎用スキル＞２項目 平均値と対応のある *t* 検定

(A = 1 年前期、D = 2 年後期)

クラスター	1		2		3		4	
実施期	A	D	A	D	A	D	A	D
筋道を立てて考えることができる	3.71	3.86	3.34	3.55	3.22	3.66	3.19	3.75
有意差	n.s.		n.s.		$t(40)=-2.808,$ $p<.05$		n.s.	
自分の意見を上手く発信することができる	3.71	3.63	3.21	3.55	3.05	3.32	3.25	2.81
有意差	n.s.		$t(55)=-2.887,$ $p<.05$		n.s.		n.s.	

※有意水準  $\alpha = 0.05$ 

分散分析の結果より、「３：平均以下／Ｖ字型」群の学生は、その他の学生と比べて、入学時点で、論理的な思考や、自分の意見の発信に苦手意識があることが示唆された。また、２年後期の時点では、進路関係の情報収集に限らず、全般的な情報収集が苦手な可能性が考えられた。一方で、対応のある *t* 検定の結果より、「３：平均以下／Ｖ字型」群の学生は、２年後期には、筋道を立てて考えることができるという感覚が強まっていることが示唆された。

### iii. ＜セルフ・マネジメント＞

＜セルフ・マネジメント＞で、１年前期・後期、２年前期共通で実施した項目の平均値のクラスター間での違いを検討するため、分散分析と多重比較を行った（表９）。

表９ クラスター×＜セルフ・マネジメント＞２項目 分散分析・多重比較

(A = 1 年前期、B = 1 年後期、C = 2 年前期)

	実施期	1	2	3	4	有意差
すべきことは優先順位をつけて実行できる	A	4.20	3.57	3.56	3.00	1>2・3・4
	B	4.11	3.93*	3.71	3.63	n.s.
	C	3.83	4.04*	3.92	3.67*	n.s.
計画的に時間を使うことができる	A	3.40	3.05	3.10	2.56	1>4
	B	3.46	3.00	2.83	2.75	1>3
	C	3.27	3.26*	2.97	2.8	n.s.

※有意水準  $\alpha = 0.05$ 

優先順位付けに関しては、入学当初は「１：高得点維持」群が、他の群よりも高いが、以降は有意差は確認されなかった。時間管理においても、１年後期までは、「１：高得点維持」群が、「４：低得点／２年後期下降」群と「３：平均以下／Ｖ字型」群よりも有意に高かったが、２年前期になると有意差は確認されなかった。

＜時間の使い方＞の１年後期と２年後期の間の変化を見ると、「授業の課題に取り

組んだり、準備学習、復習をする」(1年後期：3.58、2年後期：4.00、 $t(147)=-2.74$ ,  $p<.05$ )、「大学外でアルバイトや仕事をする」(1年後期：2.16、2年後期：3.94、 $t(146)=-7.83$ ,  $p<.00$ )において上昇が見られた。2年生全体の傾向として、1年次よりも学業に取り組む時間が増えている一方で、アルバイト等に費やす時間も増えているため、時間管理を難しく感じている可能性が示唆された。

#### iv. <問題と距離を取る態度>

<問題と距離を取る態度>の項目ごとに、クラスター間に有意差があるか検討したところ、以下の2項目において有意差が見られた(表10)。

表10 クラスター×<問題と距離を取る態度>2項目

(B= 1年後期、D= 2年後期) ※有意水準  $\alpha = 0.05$

	実施期	1	2	3	4	有意差
生活の中で悩みがあるときには、考えすぎないようにしている	B	3.60	2.93	2.70	2.81	$1 > 2 \cdot 3$
	D	3.26	3.25	2.95	3.31	n.s.
「こう思ふべきだ」と自分に強制することが少ない	B	3.46	3.05	2.72	2.94	$1 > 3$
	D	3.24	3.16	3.17	3.06	n.s.

1年後期では、「生活の中で悩みがあるときには、考えすぎないようにしている」において、「1：高得点維持」群が、「2：平均維持」群、「3：平均以下／V字型」群よりも高く、「こう思ふべきだ」と自分に強制することが少ない」において、「1：高得点維持」群が「3：平均以下／V字型」群よりも高い。一方で、2年後期になると、クラスター間の有意差は見られなかった。

「3：平均以下／V字型」群のみを取り出し、1年後期から2年後期の間での変化を対応のあるt検定を行い、検討した。結果、「何か悩み事があるときには、ちょっとやめて、間をとれる」(B期：3.17→D期：3.51、 $t(40)=-2.103$ ,  $p<.05$ )、「こう思ふべきだ」と自分に強制することが少ない」(B期：2.71→D期：3.18、 $t(38)=-2.30$ ,  $p<.05$ )と、若干であるが、有意な上昇が見られた。1年次よりも、2年次のほうが、悩みに巻き込まれないような態度を身につけ、自分への要求も和らいでいることが推察された。

## 4. 研究1：考察

2年間における<展望>得点の変化に着目してクラスター分析を行った結果、4つのクラスターが生成された。それらの特徴を以下の表11、12に示す。

表１１ ＜展望＞に変化の見られないクラスターの特徴

「１：高得点維持群」	「２：平均維持群」
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時点から、他のクラスターの学生と比較して、基礎的な学習方略を身に着けている。＜基礎的な学習方略＞</li> <li>・学習面のみでなく、今後社会に適応する際に必要とされるスキルも高い傾向にある。＜汎用的スキル＞＜セルフ・マネジメント＞</li> <li>・問題や悩みに巻き込まれずに、距離を置くことが他のクラスターの学生と同等かそれ以上に得意である。＜問題と距離を取る態度＞</li> <li>・大学生活を上手く送れているという感覚が他のクラスターの学生と比較して強い。＜大学適応感＞</li> <li>・職業選択や、その職業についての情報を得ることに自信を持っている。＜進路選択に対する自己効力感＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セルフ・マネジメントのスキルは、「１：高得点維持群」の学生に次いで身に着けている傾向にある。また、１年次から２年次にかけて、優先順位付けや時間管理の面で成長が見られる。＜セルフ・マネジメント＞</li> <li>・大学に適応できている感覚は概ね持てている。＜大学適応感＞</li> <li>・職業選択や、その職業についての情報を得ることに概ね自信を持っている。＜進路選択に対する自己効力感＞</li> </ul>

表１２ ＜展望＞に変化の見られるクラスターの特徴

「３：平均以下／Ｖ字型群」	「２：平均維持群」
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時点では、論理的な考え方、自分の意見の発信、情報収集には苦しさを感じている。２年後期になると、論理的に考える力を伸ばすことが出来たと感じている。＜汎用的スキル＞</li> <li>・１年後期では、問題や悩みがあると、それに巻き込まれやすい傾向が強かったが、２年後期時点では、悩み事から距離をとって、巻き込まれにくくなり、自分への要求も和らいでいる。＜問題との距離を取る態度＞</li> <li>・職業選択や、その職業についての情報を得ることに関しては、「１：高得点維持群」「２：平均維持群」ほど自信を持っていない。＜進路選択に対する自己効力感＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時点で、基礎的な学習方略が未習得な傾向にある。＜基礎的な学習方略＞</li> <li>・入学時から、セルフ・マネジメント・スキルが未習得の傾向にあるが、２年間で成長が見られる。＜セルフ・マネジメント＞</li> <li>・大学に適応できている感覚は、２年間を通してあまり強くない。＜大学適応感＞</li> <li>・職業選択や、その職業についての情報を得ることに関しては、あまり自信がない。＜進路選択に対する自己効力感＞</li> </ul>

## ５．研究２：方法

研究２の目的は、2014 年度入学生を対象に半構造化面接調査を行い、学生調査による量的分析では見ることの出来なかった将来キャリア展望の変遷について、質的な検討を行うことである。

### （１）調査協力者

面接調査の実施に同意した2014年度入学生8名（男性4名：女性4名）に対して、半構造化面接による調査を行った。協力者は、教育学科4名、児童教育学科4名であった。

### （２）手続き

2015年度前期の学生調査実施時に、「大学生生活に関するインタビュー調査ご協力のお願い」を、2014年度入学生に配布した。調査の協力に同意を示す学生に対しては、メールアドレスの記入を求め、即日学生調査と共に回収した。34名の学生が調査に同意を示した。後期の中間テストが終了した11月中旬に、同意を示した34名の学生に対して、「インタビュー調査ご協力のお願い」のメールを送信し、協力者を募った。返信のあった学生と実施日の調整をし、11月下旬から12月中旬にかけて、8名の学生にインタビューを行った。面接調査は、学内でプライバシーが保たれる個室で実施された。最初に、調査の主旨を説明し、同意書に署名を得た。半構造化面接は1時間程度であり、協力者の同意のもの、ＩＣレコーダーに録音した。質問項目は以下の通りである（表13）。録音データを逐語化し、分析の材料とした。

表13 半構造化面接で用いた質問項目

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後の進路をどのように考えているか。</li> <li>・そのような進路展望を持つに至った経緯。</li> <li>・その進路以外にも選択肢を考えているか。または考えたことがあったか。</li> <li>・進路展望の変遷を経て感じたこと。</li> <li>・現在、進路に関して抱いている不安や困りごと。</li> <li>・進路に関して、大学側に求めるサポート。</li> </ul> |
|--|

## 6. 研究2：結果

協力者の中で、教職（幼稚園・小学校・中学校）を志望している学生が4名、教職以外の志望、または未決定の学生が4名であった。本調査では、妥当な質的分析を行うだけのデータ量が不足しているため、逐語化されたデータの中から、将来キャリア展望に関わるキーワードを拾うのみに留める（表14）。

「迷いながらの教職志望」：現時点で教職を志望している学生でも、教職以外の進路を選ぶ可能性を自覚していたり、または検討した経験を持っていた。一直線に教職を志望しているわけではなく、悩みながら進んでいる様子が見られた。

「授業による進路選択・決定行動の促進」：1年後期に開講された共通科目「キャリア・デザイン基礎」を履修した学生は、教職以外の職業の具体的な情報を得たり、計画的に進路に向かって進んでいくことの手助けになったと自覚していた。

「教育学部外のネットワークから得る情報」：教育学部外の人脈や、大学サービスから、教員以外の進路に関する幅広い情報を得ていた。反対に、そのようなネットワークを持っていないと自覚している学生は、教員以外の進路の情報が不足していると感じていた。

「インターンシップによる体験的検討」：学校や一般企業のインターンシップに参加することが、その職業が自分の興味・関心に合っているか、自分に適性があるかなどを体験的に検討する機会となっていた。

「時間制限による進路選択・決定行動の促進」：インターンシップ・講座の申し込みなどの締め切りを意識することで、自らの将来キャリアについての思索が促進されていた。

表14 半構造化面接から得られたキーワード

## 7. 総合考察

本研究は、2014年度入学生の、2年間にわたる将来キャリア展望の変遷について検討した。研究1では、学生調査のデータを統計的に分析し、クラスター分析の結果から、＜展望＞得点が入学当初からほぼ変化しないクラスターと、上昇や下降を経験しているクラスターの存在が示唆された。研究2では半構造化面接を実施し、将来キャリア展望に関わるキーワードを見出した。



### (1) <展望>に変化のないクラスターの特徴

表11より、<展望>を平均かそれ以上に維持している「1：高得点維持群」(35名)と「2：平均維持群」(56名)は、大学生活を安定して過ごしていることが示唆された。特に、「1：高得点維持群」の特徴から、将来キャリアの展望が入学時点から継続して明瞭な学生は、学習面でも生活面でも、大学生活を健康的に送っていることが示唆された。これらの学生が教員志望か、または他の進路を希望しているかは本研究からは定かではないが、「1：高得点維持群」のような学生が最終的に教員として採用される確率が高いか否かなど、今後も調査を継続して検討する必要がある。また、例年の教員採用試験の合格率を考慮すると、<展望>に変化のないこれらの学生の中でも、教員を志望する学生の数割は希望通りの進路に進めない可能性がある。そのような状況に陥った学生に対しての支援や予防策などを検討する必要がある。

### (2) <展望>に変化の見られるクラスターの特徴

表12が示す通り、<展望>に変化の見られる2つのクラスターの間には、異なる特徴が見られた。「3：平均以下／V字型群」の入学当初から将来キャリア展望があまり明瞭でない学生は、1年後期に若干展望が不明瞭化するが、2年後期では持ち直すことが示唆された。この持ち直しには、2年間で養成された論理的思考力や、問題や悩みに巻き込まれにくい態度が関係している可能性がある。さらに、研究2の結果から、「授業による進路選択・決定行動の促進」に表されるように、1年後期に「キャリア・デザイン基礎」などの授業に取り組むことが、2年後期に将来キャリア展望が明瞭化する契機になった可能性も考えられた。また、「時間制限による進路選択・決定行動の促進」が表すように、様々なインターンシップや講座への申し込みなどの締め切りにより、選択を迫られる機会が、将来キャリアについての思索を促進し、将来キャリア展望の明瞭化に繋がった可能性も考えられた。

「4：低得点／2年後期下降群」の特徴から、将来キャリアの展望が入学当初から不明瞭な学生は、学業面での難しさや、大学に適應することの難しさを感じており、2年後期での更なる将来キャリア展望の不明瞭化へと繋がっていた。将来キャリアの展望を持たないまま教育学部に入学すると、入学後に進路を明確にするのが難しい現状があることが示唆された。また研究2で示されたように、教育学部以外のネットワークが不足していると、教職以外の選択肢に関する情報が十分得られずに、将来キャリアについての検討が難しくなるという状況がうかがわれた。

### (3) 将来キャリア展望の明瞭化・再構築に向けた支援の可能性

上述の通り、「3：平均以下／V字型群」の<展望>の2年後期の持ち直しには、論理的思考力の養成と、問題との距離を取る態度の習得との関連性が考えられた。論理的思考力は、中央教育審議会(2011)により、社会的・職業的自立のために身に着

けるべき「基礎的・汎用的能力」の一つとして挙げられている。また、国立教育政策研究所（2013）は、変化の激しい21世紀で生き抜くための資質として「21世紀型能力」を提唱し、「思考力」（論理的・批判的思考力、問題発見解決力・想像力、創造的思考力、メタ認知）を中核として、それを支える「基礎力」（言語・数量・情報スキル）と、使い方を方向づける「実践力」（自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力、持続可能な未来への責任）の三層構造を提示している。この「実践力」には、生き方を主体的に選択するキャリア設計力が含まれており、思考力は、キャリア選択における重要な資質と位置付けられている。楠見（2010）は、論理的思考力を批判的思考力の一要素とし、その育成の具体的方策として①批判的読解・批判的視聴、②討論、③レポート・論文作成、④グループ活動の4つを挙げている。大学教育では、授業の中にレポート作成、グループディスカッション、アクティブ・ラーニングを取り入れており、論理的思考力を養成する機会が豊富にあると言える。特に、教育学部1年前期必修科目の基礎演習Ⅰでは、意見提示型のレポート作成を重点的に行っている。即ち、最も基本的なことではあるが、大学での学業に真面目に取り組み、授業への積極的参加を促すことが、将来キャリア展望が不明瞭化している学生にとっては一種のサポートとなると思われる。

また、悩みに巻き込まれ過ぎずに問題と距離を取る態度も、自分自身をセルフ・モニタリングして、メタ認知を持つことにより促進されると考えられるため、論理的な思考力の養成と関連している可能性が考えられる。学生にとっては、客観的に傾聴してくれる第三者に悩み事を話す機会が、自分の考えや状況を整理して、自分を客観視するためのサポートになると思われる。キャリア・センターのみでなく、学生相談室の利用や、アドバイザー教員などとの面談が有効に働くと思われる。

さらに、「キャリア・デザイン基礎」などのキャリア系科目の履修を促すことにより、具体的な情報の獲得、進路選択・決定行動の促進が期待できる。また教育学部以外の学生と関わる機会ともなるため、学部外のネットワークを広げ、幅広い情報を収集できるメリットがあると推察される。

## 8. 今後の課題

学生調査は、アンケート調査という性質上、回答者の自己認知に左右される項目が多く含まれている。その点を補うために、個人情報に配慮しながら、成績などとの客観的指標を含めた分析を行う必要がある。また、今回の調査では、半構造化面接のデータに対してキーワードを拾うのみに留め、詳細な分析をしていない。今後、十分なデータを収集し、確立された分析手法を用いて、学生の将来キャリア展望の変遷や、その要因などについて明らかにしていく必要がある。今後も学生調査のデータの継続的な分析や、半構造化面接の実施により、大学生活での各段階における将来キャリア展望

の実態を調査していく予定である。

(謝辞) 学生調査の準備段階から本研究に多大なご助言を下された関田教授、調査用紙の配布回収にご尽力下さった鈴木教授・舟生准教授に深謝いたします。またご多忙の中、学生調査実施にご協力下さった教職員の先生方・大学職員の皆さま、貴重な授業時間を使い学生調査に回答頂いた学生の皆さま、さらに半構造化面接にご協力頂いた 8 名の方に感謝致します。

#### 参考文献

- 中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)) (2015 年 12 月 15 日 アクセス)
- 藤田正 (2010)「大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係」奈良教育大学紀要 59 (1)、47 - 54
- 藤田正・富田翔子 (2012)「自己調整学習に及ぼす学習動機および学習方略についての認知の影響」奈良教育大学 教育実践開発研究センター研究紀要 21、81 - 87
- 福森英明・森川友子 (2003)「青年期における「フォーカシング的態度」と精神的健康との関連—体験過程尊重尺度 (The Focusing Manner Scale; FES) 作成の試み」心理臨床学研究 20 (6)、580-587
- 国立教育政策研究所 (2013)「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」(<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf>) (2015 年 12 月 15 日 アクセス)
- 児美川孝一郎 (2014)「大学と職業の忘れられた連関を取り戻す—大学におけるキャリア支援・教育の現状と今後の課題—」『大学評価学会年報』9・10 合併号、76-104.
- 楠見孝 (2010)「批判的思考と高次リテラシー」楠見孝編、日本認知心理学会監修『現代の認知心理学<3>思考と言語』、北大路書房
- 文部科学省 (2015)「平成 26 年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」文部科学省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/senkou/1354821.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1354821.htm)) (2015 年 12 月 11 日 アクセス)
- Savickas, M.L. (2011) Career counseling. Washington, DC: American Psychological Association.
- 創価大学 教職キャリアセンター (2014)「平成 26 年度教員採用試験合格者数」(<http://educareer.soka.ac.jp/assets/pdf/goukakusha26.pdf>) (2015 年 12 月 15 日 アクセス)
- 創価大学 教職キャリアセンター (2015)「平成 27 年度教員採用試験合格者数」(<http://>

- [educareer.soka.ac.jp/assets/pdf/27goukaku.pdf](http://educareer.soka.ac.jp/assets/pdf/27goukaku.pdf)）（2015 年 12 月 15 日 アクセス）
- 浦上昌則（1995）「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）42,115-126
- 八幡ななみ・高野久美子（2014）「教育学部生のキャリア展望に関する基礎的研究（1）  
—新入生のキャリア展望に着目して—」創価大学教育学論集 66、93-112

## **The Study on the Career Prospects of College Students in the Faculty of Education (2)**

**Nanami YAWATA, Kumiko TAKANO**

### **Abstract**

This study examines the career prospects of sophomore college students in the faculty of education. The first part of this study (N=148) statistically analyzes the data of the student survey, which has been administered each semester since 2014 by career education committee. The cluster analysis was conducted based on the scores of Career Prospect (CP) scale in the 1st, 2nd, and 4th semester. Four clusters were generated; (1) High CP cluster, (2) Average CP cluster, (3) Below average CP / V-shaped cluster, and (4) Low CP cluster. The analysis of variance (ANOVA) were conducted to illustrate the characteristics of each cluster. The results indicated that students of “high CP” and “average CP” clusters evaluated themselves positively in terms of academic skills, the sense of college adaptation, and social adaptation skills. Students of “below average CP / V-shaped” cluster perceived their career prospects got unclear in the 2nd semester, then recovered in the 4th semester. It was implied that the recovery in career prospect could be related to the growth in logical thinking and attitude of keeping distance from problems. The results also indicated that students of “low CP” cluster might have been feeling difficulties in academics and adaptation to college since the 1st semester. For the second part of the study, interview surveys were conducted (n=8). Five key concepts were extracted from the interview data. The concepts included (a) conflict about aspiring teaching profession, (b) promotion of career choice behaviors by classes, (c) attaining information from networks beyond the faculty of education, (d) experiential investigation of career options through internships, (e) promotion of career decision behaviors by set deadlines. Based on the findings, the possible student supports were discussed.